

美少女執務官は××× (ペケみっつ)

花水姫

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

フェイト・T・ハラオウン。年齢は13歳。中学2年生。

ミッドでは美少女執務官と名高い彼女は、その容姿、その性格から聖祥中5大美少女に数えられている。

しかしそんな彼女は、普通の人は想像しないある事があった。彼女のファンには絶対言えないようなソレは……。

※※注意事項※※

ヤンデレ(?) ストーカーフェイトちゃんを、別の人が語るネタ小説です。

当然ですが、私の思うヤンデレを書くので、貴方の思うヤンデレとは違うと言うことを念頭に置いて閲覧してください。

ネタ小説です。大事なので2回書きました。仏陀の様に寛容な心で許せる人だけ見てください。

凄いキャラ崩壊があります。と言うかそれを楽しむ小説です。

この小説の中には犯罪行為に及ぶシーンが多々ありますが、決してそれらを助長する意図で書いたわけではありません。犯罪ダメ絶対。

もし読んでいて気分が悪くなったらすぐさま閲覧を中止してください。

アンチ・ヘイトの意図はありませんが、キャラ崩壊が行き過ぎてそ

ういう風にみられるかもしれません。

短編集みたいな物です。

現在更新予定はありません。

—— 以上の事を守る人のみ、見る事を推奨します ——

私の戦友は
×××××
私の親友は
×××××

目次

16 1

私の親友は×××
『私の親友は××』
××

どうもみんな、なのはだよ！

そんな挨拶から始める私は高町なのは、中学2年生！ 花も恥じらう魔法少女！

ん？ JCは少女じゃないって？ 私がそう言えばそうなんだよ。

まあ、今回は私の話をするための場では無いので、割愛。

今回はそう、私の友人であるフェイトちゃんの話をする場なのだ。フェイトちゃん、名前はフェイト・テストロッサ。一応今はリンデイさんの家の養子になってるから、フェイト・T・ハラオウンが正しいのかな。ただ面倒だからって聖祥では『フェイト・テストロッサ』で通してるみたい。

そんなフェイトちゃんは、中学生になってから好きな人が居る。こちらこそ、落ち着きなさい。

ぶっちゃけフェイトちゃんはモテる。モテモテだ。同年代では高い身長に発育の良い体、性格も大人しく誰にも分け隔てなく接する。ハッキリ言って相手を選んでも恋人なんて簡単に作れるだろう。

だけどフェイトちゃんは恋人を作らない。執務官の仕事もあつて忙しいから作りにくいってのもあるだろうが、理由はそれだけじゃないことは、フェイトちゃんの親友である私達には周知の事実だ。

フェイトちゃんが好きな人。それはハッキリ言ってしまうえば目立つような人じゃない。イケメンでもないし、お金持ちでもない。ぶっちゃけパツとしない。

ただ、こんなことをフェイトちゃんの側で言ったりなんかしたら……。

『なのは？』

「ふえ、フェイトちゃん!? い、いきなり念話なんかしてど、どうしたの?」

そう思っていたらフェイトちゃんから念話が飛んできた。そう、口に出している訳じゃないのに、それどころか側に居ないのにこうして察知してくる。

『ううん。ただ、なのはが“彼”の悪口言ってるような気がしたから』
「(そっすっそそそそっそ、そんな訳ないじゃーん!)」

コワイ! 実際コワイ!

恋する乙女は強いと言うけど、フェイトちゃんに限っては怖い!

『そっか、そうだよ。ごめんね急に』

「(う、ううん! 大丈夫だよ!)」

こんな感じで、フェイトちゃんの周りで“彼”のことは第一級禁止指定言語に設定されている。私達はこの1年で随分と“彼”の事を意識的に考えないようにするのが上達した。

ただ、今は、そんなフェイトちゃんと“彼”の事を話さなくてはならないから、話そう。
いや、念じる、が正解だけど。

そんなフェイトちゃんが“彼”の事を好きになったのは実は小学生の頃だと言う。転校してきて未だ学校に慣れてなかったフェイトちゃんに優しく接したそう。

もう耳がタコになる位聞いた話なのでカンペを見なくても言える。

その頃のフェイトちゃんは色々忙しかったし、結局その気持ちを恋心だと認識したのは中学生になってからだ。

しかし、その恋心に気付いてから、フェイトちゃんは壊れてしまっ

た。

親友の事を壊れたなんて評するのは嫌だが、しかしそう言うしかない。

今回は私の知っているフェイトちゃんの一日を教えよう。

まず、フェイトちゃんは朝起きたら部屋に貼ってある「彼」の特大ピンナップに祈りをささげる。

これを知ったのは私がフェイトちゃんの家泊まりに行った時だ。フェイトちゃんは何と朝5時に目覚め、自分の身だしなみをお風呂で整えると、その後1時間程祈りをささげるらしい。

全裸で

目が覚めた時、まるで美の女神ヴィーナスも裸足で逃げるような美少女が、全裸で朝日を浴びてピンナップに祈りをささげている場面を見た私はどうすればよかったのか。

ぶっちやけ引いた。

私が恐る恐る何をしているのか聞くと、凄顔で睨まれた。

怖かった。めっちや怖かった。中学生でおもらしするところだった。

その後お祈りが終わると、良い感じに朝ご飯の時間になる。その時に朝何をしていたのか聞くと、一日を迎えられる喜びと生き

ている感謝をささげているのだと言う。いったいどこの宗教だ。怖すぎる。

「彼」は一体フェイトちゃんに何をしたと言うのだ。

しかもその特大ピンナップをどうやって手に入れたのか聞くと「えつとね。サーチャーで気づかれないように「彼」の写真をいっぱい撮って、その中で気に入った一枚を本局のプリンターで印刷したんだ」

と、可愛らしい笑顔ではにかみながら言われた。

可愛いは正義。可愛いから許す、と言いたいところだが、盗撮は犯罪だと思う。

だがその時は怖くて何も言えなかった。

そんなフェイトちゃんは昼は学校があれば普通に学校に来る。仕事があれば仕事に行く。この辺は普通だ。

普通じゃないのは休日だ。休日のフェイトちゃんはまず朝ご飯を食べ終わると散歩に出かける。

バリアジャケットを纏って。

なぜ散歩にバリアジャケットを纏う必要があるのか聞いてみると

「寒いからだよ?」

と、普通に言われた。それどころか何を言っているんだ、とでも言いたげな顔で首を傾げられた。

頭がおかしくなりそうだった。もしかして狂ってしまったのは彼女では無く、私の方なのではないだろうかと思う位だった。

その時は家にいたクロノくんが私の肩を叩いて、黙って首を横に振ってくれたから、諦められた。もう、フェイトちゃんは手遅れなの

だと。

そうして、散歩に行くフェイトちゃんに付いて行くと、普通に空を飛んで、ある家に行く。

一応、強力な隠蔽魔法を掛けているから、さうとう感覚の鋭い魔導師じゃないと気づかないらしいが、魔法の隠匿とはいったいなんだっただのだろうか。

そしてフェイトちゃんはある家が見える場所に付くと、その家のあの部屋を監視しだす。

中に誰も居ない事を確認したフェイトちゃんは、なんとその部屋に侵入した。

短距離転移で。

それはもう鮮やかな侵入方法だった。

魔導師が泥棒になったら普通はわからないだろうな、と思える完璧な侵入経路だった。

そうして不法侵入したフェイトちゃんは、まずその部屋のベッドに入り、ゴロゴロ転がり出した。

怖かった。その時のフェイトちゃん表情は、まるで違法薬物を決め打ちした中毒者みたいな表情だった。

気になって家の表札を確認すると見知った、いや、残念ながら良く聞いてしまう苗字が目に入った。

そこで私は確信したのだ。

「彼」の家だ、と。

そうして思う存分「彼」の布団に染みついた「彼」のにおいを堪能したフェイトちゃんは、ベッドの側のごみ箱をあさり、丸まった紙屑を取り出すとバルデイツシュに収納していた。

私も初心なネンネじゃない。そういう知識にも興味津々なお年頃だ。使う機会は今の所友人同士での猥談でしかないが、それでも私はその紙屑に心当たりが付いた。

そうして、バルデイツシュがとても哀れに思い、目を逸らした。その現実から、その時のフェイトちゃんの表情から。

そして、多分まだなにか色々やってたと思うけど、また短距離転移で帰ってきたフェイトちゃんは犯罪者を捕まえた時より、輝かしいやり遂げた表情をしていた。

その後、「彼」の部屋が見える位置でしばらく待つと、「彼」が部屋に帰ってきた。

そして、着替えをさせた。

その様子を、フェイトちゃんはいつの間にか取り出したなんかすごく高そうなカメラで連射させた。なんと堂々とした盗撮なのか。

しかも、「彼」の家のその窓は盗撮をするには、向かいの家の天井でなければならぬような場所だった。

つまり「彼」は自分が盗撮されるなんて、夢にも思っていないのだろう。カーテンを開けっぱなしにしたまま無防備に着替えさせたのだ。

そんな完全に無防備な「彼」を、フェイトちゃんは嬉々とした表情で撮りまくる。

そこで私はふと気になりフェイトちゃんに質問した。

「サーチチャーは使っていないの？」

盗撮が犯罪なのはもちろんだが、サーチチャーをみだりに使う事もミッドでは盗撮、盗聴などの罪で捕まる。

例え本当にそれをしていなかったとしても、その可能性がある、として捕まる。

と言うかミッドでは指定された区画以外での魔法使用は禁止されている。

これが、魔法文化なしの世界に魔導師が居る場合の恐ろしさなのか、と私は執務官本人に見せつけられた。

話がそれたが、私の質問に答えてくれたのはフェイトちゃんではなく、バルディツシュだった。

「私が操作し、音声を含め動画を撮影しています」

「その、素直にやっていいの？」

「……」

バルディツシュは少しだまり、ちよつと小声で言った。

「一度サーチチャーで録画するふりをしたら、サーは激怒し、廃棄処分寸前まで追いやられました」

そう言うバルディツシュの声は悲しみにあふれていた。

いったいフェイトちゃんは何をやっているのか、長年の相棒を犯罪の片棒を担がなかっただけで廃棄処分するだなんて。

なんとかその騒動はリンディさんやクロノくんの計らいもあり、収まったそうだが、バルディツシュはそれからずっと大人しく従ってい

るらしい。

しかもバルデイツシュ曰く、その時のフェイトちゃんは無表情のまま

「やっぱり道具に人工知能なんて無駄なんだよ……」

と、呟いたらしい。

怖すぎる。

そんなフェイトちゃんは「彼」の着替えを写真と動画に収めると、「彼」が部屋から出ていくのに合わせて自宅へ帰る。

そして自宅へ帰ると、自室のパソコンに向かい、今撮った写真や映像などを整理し始めた。

その時のパソコンのフォルダを見て私は驚愕した。

パソコンのフォルダは

『〇月〇日 朝』

『〇月〇日 昼』

『〇月〇日 夜』

『〇月×日 朝』

と言ったように、ずらりとファイルが並んでいた。

「ねえ、フェイトちゃん、これ、いつからあるの?」

そう、私が質問するとフェイトちゃんは私の方は見ずに、ファイルを整理しながらなんでもない様子で言った。

「ん〜? 去年の6月からだよ〜?」

それは、私達がフェイトちゃんに好きな人が居る、と告白される一月前だった。

私は聞かなかったことにした。

その後は普通にお昼を食べて、暇なら遊びに行くこともある。

その時は私も居たし、他の友達も呼んでみんなで遊びに出掛けた。

フェイトちゃんは彼が絡まなければ、いつも通り、普通以上に美少女なフェイトちゃんだった。

そして、私はフェイトちゃんの家で2泊3日の予定だったので、その日もフェイトちゃんの家にお邪魔した。

夕飯も普通に食べ、暫くテレビでも見てダラダラすると、フェイトちゃんの携帯のアラームが鳴った。

そのアラームに気付くとフェイトちゃんは、テレビなんて気にせず慌てて自室に戻った。

どうしたのか気になり付いて行くと、フェイトちゃんはバルディッシュに指示をだし、多分サーチャーから送られている映像を映し出した。

そこはどこかのお風呂場だった。

そうして少し待っていると、彼が現れた。
当然全裸で。

「ちよ、ちよっとフェイトちゃん!？」

まさかここまでやっているだなんて。そう思いながら私はフェイ

トちゃんの名前を叫ぶが、フェイトちゃんは私に気付いてないのか、血走った眼でうつされる映像を凝視していた。

そして、「彼」のシャワーシーンが映し出されていく。別に色気もなにもない普通にシャワーを浴びているシーンだ。

ただありがたい事は、「彼」の体はそこそこ鍛えているのか、引き締まっていて見苦しくなかった事。

残念なことは、問答無用で「彼」の、その………『大事な部分』を映す事だった。

初めて家族以外の男性のアレを見たのが、友人の思い人というのは、私の人生最大の汚点だ。

その映像を見ているとフェイトちゃんも興奮してきたのか、服を脱ぎだし、私が居るのも気にせずおっぱじめた。

大声で、なにも憚れることなく、おっぱじめおったのだあの小娘は！

ああ、憎らしい。あの豊満な体が憎らしい。なぜ、こうも差がついてしまったのか。やはり日本人はダメなのか。ぐぬぬっ

もう、私は対処不可能と感じ部屋から出た。部屋を出るとフェイトちゃんの大声は聞こえなくなる。一応防音か遮音結界でも張っているのだろうか。

そうしてリビングに戻った私を、クロノくんは優しい視線で見つめてきた。

そうして私に近づくと、両肩を叩き私に言った。

「諦める。悲しい事だが、アレは僕の義妹で、君の親友だ」
そう言ったクロノくんの視線はとても優しく、生暖かい物だった。
それは同類に向けられる、全てを諦めた者の視線だった。

「くや、じいつ。ぐやじい！」

私は泣いていた。

「あなたには、わががらないでじようねえ」

「いや、わかる。わかるぞ」

私はなぜあんな子と友達になろうなどと思ったのか。5年前の私を殴り飛ばしデイバインバスターで吹き飛ばし、バインドで貼り付けにした後、防御魔法すら許さず、スターライトブレイカーを連発した後、説得したい気分だった。

しかし彼女は、フェイトちゃんは基本良い子なのだ。ただ「彼」が関わりとおかしくなるだけで。

そうして、泣いている私を、クロノくとアルフ。リンデイさんは慰めてくれた。

しばらくするとフェイトちゃんはスッキリした顔で降りてきて、そのまま風呂場へ向かった。

私はその表情を見た時何とも言えない殺意が芽生えた。今なら惑星一個すらスターライトブレイカーで吹き飛ばせるのではないかと思わせる程の殺意だった。

「止めるんだ、なのは。それをしても何も解決はしない」

そんな私の心境に気付いたのか、クロノくんはそう言って私を落ち着かせようとした。

その顔は、もう全てを諦めた老兵の顔に見えた。

そんな悲しみに包まれながら、寝る時間になった。

私はフェイトちゃんの部屋で寝る。

もう夜だ、あとは朝一のフェイトちゃんのお祈りにさえ気を付けて居ればもう良いだろう。そう思い私は寝ようとした。

しかし、寝る前の私にフェイトちゃんが声をかけてくる。

「あ、ごめんなのは、昨日は我慢したんだけど、私最近コレ聞かないと寝れなくて」

そう言いながらフェイトちゃんを取り出したのは音楽プレイヤーだった。

「ああ、別に気にしないでも良いのに。私は大丈夫だよ」

今までの所業に比べれば、音楽を聞きながら寝るなど些細な事。その時の私はそう思ったのだ。

しかし、私は気づくべきだった。フェイトちゃんは、フェイト・テスタロッサは『壊れている』事を。もつとその事実を重く受け止めるべきだったのだ。

そうして、フェイトちゃんが音楽プレイヤーをスピーカーに繋げ、再生すると、聞こえてきたのは私の想像したような物じゃなかった。『フェイト、好きだよ。フェイト、大好き。フェイト、愛してるよ。愛してるよフェイト。フェイト、好きだよ。フェイト、大好き。フェイト——』

それは、私の予想を真上にぶち抜いて螺旋を描き、サマーソルトを決めた後、バレルロールを挟み、そのまま急降下爆撃をしてくる位

違ったものだった。

その音は「彼」の声で、フェイトちゃんへ愛をささやいていた。

ハッキリってそんなことはありえない。「彼」とフェイトちゃんは恋人関係では無いどころか、日常生活であまり喋る事すらしない。フェイトちゃんはこんなに壊れるまで「彼」の事を愛しているが、「彼」にとってフェイトちゃんは、同じ学校の超人気者な美少女程度の認識であろう事は、想像に難くない。

しかし、実際聞こえているのは「彼」の声であった。

「ね、ねえフェイトちゃん。ソレ、どうしたの？」

私がそう聞くとフェイトちゃんは

「ん？ えっとね、「彼」の友人に私が作った台本を喋るよう頼んだの。録音機器と一緒にね。その友達なのはファンだったみたいだから、良い感じに録音できたら、なのはのあられもない姿の生写真をあげるよって言ったらさ。凄い臨場感のある声が録音されてたんだ。まるで本当に私に囁いてるみたいじゃない？」

てへっ、と笑いながらフェイトちゃんが言う。

「な、なにをするダアーーーーーッ!!」

私はつい叫んでいた。

まさか、まさかその声を録音するためだけに親友すら売るとは！

女の友情は脆いと言うがまさにその通りだよ！ くそがっ!!!

「…………ごめんフェイトちゃん。それ、イヤホンで聞いてくれるかな」

「え？ あ、ごめんね、やっぱり眠れない？」

そう言いながらスピーカーから外し、イヤホンを取り付けるフェイ

トちゃん。

寝れる寝れない以前の問題だと気づいてほしい。

しかし、これで私も寝れる。今日一日色々あつて凄く疲れたしもう寝よう。

そう思ったが、しかし神は私の事が嫌いなのか、さらなる試練を課しおつた。 F U O K

ギシツ、ギシツ

と、フェイトちゃんが寝ているベッドがきしむ音がしだしたのだ。

私はそれが気になり眠れず、しかし気にせず寝ようと努力した。しかし、数秒後

「あ、ああ。私も、私も大好きだよ！ 愛してる！ 愛してるよお!!」
と、フェイトちゃんの叫びが聞こえた。

ここまで耐えた皆さんならわかるだろうから言っ飛ばしておう。

フェイトちゃんは、私が側で寝ているのにも関わらず、大きな声で艶声を上げおっぱじめおつたのだ。

おっぱじめおつたのだ、一度ならず二度までも!!

その様子と声に耐えられず、私はフェイトちゃんの部屋を静かに出て、リビングで寝た。

——『私の親友はストーカー』だった。

私の戦友は××

『私の戦友は××』
××

どうも。

その、こう言う形で語るのは初めてだから勝手がわからんな。

え？ このままで大丈夫。ですか？ そうですか、ありがとうございます
います。主はやて。

ああ、まずは自己紹介でしたね。申し訳ありません。

私の名前はシグナム。夜天に集うヴォルケンリッターの一人、烈火の将とも呼ばれている。

今回は高町も知らない、私が知っているテストロッサを語る為にこの場が設けられた。

私とテストロッサの出会いには約5年程前になる。詳しいことは割愛するが、もし知りたいなら『魔法少女リリカルなのはA's』か『魔法少女リリカルなのは The Movie 2nd Act's』を見ると良い。

……これでよろしいのですか？ あ、はい。バッチリ、ですか。わかりました。

私は色々な事情もあり管理局の仕事をするときは、良くテストロッサと共に任務に従事することが多い。

今回はそんなある時のテストロッサの話をしよう。

それはある意味で普通の任務だった。

ある管理世界に犯罪者組織が潜伏しており、そのあぶり出しと一斉検挙をするという物だった。

逮捕権を持った執務官であるテストロッサはもちろん、戦闘が予想されるので戦力として私と2個小隊程の武装局員が随行することとなった。

遠い管理世界なので現地までは次元航空艦で移動することとなる。艦長はテストロッサの義理の兄であるクロノ・ハラオウン提督。

今思えば、提督になったばかりのクロノに功績を積みさせるための任務であつたとも言えるだろう。

まあそんな任務をクロノ本人から聞かされた時は、テストロッサも当然と言わんばかりに了承した。

しかし、いざ出航し任務の内容や今後の計画等の詳しい話を乗員全員で統一するための集会でクロノが言った言葉でテストロッサの表情は一変した。

「以上、今回の任務は長期化が予想されるが、諸君の働きで一刻でも早く対象が捕まえられるよう尽力を尽くしてもらいたい」

「あの」

「どうした、テストロッサ・ハラオウン執務官」

「先程長期化、と仰いましたがどの位の期間なのでしょうか」

「そうだな、星の詳しい潜伏場所や組織の規模の確認などやる事も多い。対象の激しい抵抗も予想されるから万全を期したい。だから大体一週間くらいはかかると思ってくれ」

「い、一週、かん……」

「わかったか？」

「はい。わ、わかり、ました」

一週間、そう言われたテストロッサの表情は、真っ青を通り越して真っ白になってしまったのではないかと思うほどに血の気が引いていた。

幸いテストロッサは列の最前列に居たため、他の局員にその様子が見られたと言う事は無かった。

そうして集会が終わり、目的の世界に付くまで待機命令が出され解散すると、テストロッサは一目散に艦長室へと駆けて行った。

私はなにか嫌な予感がしてテストロッサを追いかけると、艦長室からは怒鳴り声が聞こえた。

「一週間だなんて聞いてないよ!」

「……だってそう言うのとフェイトは付いてこなかっただろう?」

艦長室では机を両手で叩きながら怒鳴るテストロッサとそれを頭が痛そうに対応しているクロノが居た。

「当たり前だよ! 一週間だよ、一週間! 一週間も『彼』に会えないだなんて、お兄ちゃんには私に死ねって言ってるの!」

「フェイト、君が『彼』の事を好いているのはわかるが、さすがに一週間顔を見ない程度じゃ死なない」

「死ぬよ! 死んじゃうよ! 死因は『彼』欠乏症だよ! ああ、もう……こんなに長くなるとは思ってなかったからポスターもタペストリーも何も持ってきてないよお……。もうダメだあ……。おしまいだあ……」

テストロッサは、叫んでいたと思ったら唐突にこの世の全てに絶望した顔になり、崩れ落ちた。

「まあたつた一週間だ。我慢しろ」

その時の私は崩れ落ちるテストロッサにそう声をかけた。

今の私からしてみればなんと愚かな事をしてしまったのか。この時の私はいくつか間違いを犯した。

一つはテストタロツサを追いかけてしまった事。そして一つはテストタロツサに声をかけてしまった事。最後に、テストタロツサに声をかけた内容だ。

そんな私をクロノは「あくあ、やっちゃった」とでも言いたげな呆れた視線で見つめていた。

そんな慰めたはずの私をテストタロツサは睨みつけ、怒鳴りだした。

「“たった”!? “たった”一週間!? 違うよ! 一週間“も”! だよ! 一週間も“彼”に会えないんだよ!」

そうして怒鳴るとテストタロツサは一気にまくしたてる。

「そもそもシグナムに私の気持ちなんてわからないだよ! 私がどれだけ“彼”の事が好きなのか、どれだけ“彼”の事を想ってるのかなんてシグナムにはわからないよ! 私が“彼”の事を考えない時なんて1秒もないのに! 私のマルチタスクの一本は常に“彼”の事でいっぱいなの! そんな私に一週間も“彼”に会うなだつて!? 我慢しろつて!? 私は“彼”の顔を見るために、“彼”の声を聞くために生きてるようなもんだよ!? そんな私に“彼”に会うなんて、そんなの拷問だよ! 犯罪だよ! “彼”に会わせない罪で逮捕だよ!!」

その後も良くそんなに言葉が思いつくなど考えてしまうほどテストタロツサはまくしたてていたが、あいにく私は覚えてない。

というか聞いてすらいない。

確かどれだけ“彼”が素晴らしいのかとか、そんな感じのふいんき(なぜか変換できない)的ニュアンスのそういうアレだったような気がしないでもない。

「そんなんだからシグナムは彼氏ができないんだよ!」

だまれ小娘

「ま、まあまあ落ち着けフェイト。潜伏場所がわからないと言つても目星は付いているんだ。世界全部を探すわけじゃないし君が頑張れば一週間かからず終わるかもしれない。そうすれば『彼』に直ぐ会えるし、それにフェイトが頑張れば『彼』も喜ぶさ。な？」

そんなテスタロッサの剣幕に呆れ、そう言ったクロノの言葉に思う事があったのか、テスタロッサは大人しくなり、しばらく何かを考えると輝かしい笑顔でクロノに向き直った。

「そうだよね！ 私が頑張つて犯罪者たちを捕まえれば直ぐに帰れるもんね！ そうすれば『彼』にも会えるし、『彼』も喜んでくれるよね！」

テスタロッサはそう言うと言ったのかやる気をだし艦長室から駆け出して行った。

そうしてテスタロッサを見送ると艦長室には私とクロノだけになる。

クロノは大きくため息を吐くと私に向かって言った。

「あまりフェイトを刺激するな。特に『彼』の事はフェイトの前で喋らないでくれ。もしフェイトが『彼』の事を喋り始めたら何も聞かずただひたすら頷く事。わかったな？」

「ああ。わかった」

私が返事するのを確認するとクロノはなにやら薬を取り出し飲み始めた。

「クロノ、それはなんだ？ 体調でも悪いのか？」

「胃薬と頭痛薬だ」

……正直すまなかつたと思っている。

今度クロノにはシャマル特性の胃薬を送ってやろう。そう心に決めた。

こんな感じで私達と犯罪者にとって絶望の任務の一日は終わった。

*

*

二日目〜五日目

犯罪組織が潜伏していると思わしき世界の怪しい場所を一斉に捜査する。

対象にばれないようになるべく隠密に、しかし逃げられないようになるべく素早く詳しい場所を探す必要がある。

この時のテストロッサの活躍は目を見張るものがあつた。クロノが必要ないのではないかと思うほどの適格な指示や資料からの予想、あぶり出しなど。

しかし、それも出航してから三日目位までの事で、四日目あたりからテストロッサの様子がおかしくなってきた。

まず、時折ボーっとする事が増えた。仕事のしすぎかと思ひ半日休ませたが直らなかつた。

そうして一日が経つと、テストロッサはよく物を落すようになってた。手元がおぼつかないらしい。

「大丈夫か？」

そう聞いても

「だ、だいじょ……大丈夫。大丈夫だよ」

なんて大丈夫じゃなさそうに返す。しかし全く持つて原因はわからなかつた。こんな時シヤマルがいてくれたら、と思うがシヤマルはいない。私はできるだけテストロッサに気を配つてやろうと思つた。

六日目

この頃になるとテストタロツサがヤバイ。もう何がヤバいつてヤバイ。めっちゃヤバイ（語彙力不足）

まず手元だけじゃなくて目元もおぼつかなくなってる。ヤバイ。まるで焦点があっていない。

しかも良く何事かを眩く様になってる。あと精神安定の為に「彼」と思わしき男性の写真を部屋の隅で笑いながら見てたりする。

「だいじょうぶだいじょうぶだいじょうぶだいじょうぶ。わたしはだいじょうぶだよ。うん。だいじょうぶ。きみもだいじょうぶだよね。そうだよね。わたしはきみとはなれててもきみのことだいすきだもん。きみもそうだよね。だよね。だいじょうぶだよね。うん。わかってる。うわきなんてしてないよ。だいじょうぶだよ。だいじょうぶだいじょうぶだいじょうぶだいじょうぶだいじょうぶだいじょうぶだいじょうぶ」

ヤバイ。コワイ。昔主はやてや他のヴォルケンリッターと共に見たホラー映画より怖い。

七日目

この頃になるとテストタロツサに連れられ周りもヤバくなる。テストタロツサもヤバさが天元突破グレ○ラガンしてしまったのか、公然と狂いだす。

六日目までは未だ自制心が働いていたのか人目のつかないところ

で薬物中毒者のように「彼」の写真を見続けたり、「彼」の声を聞き続けたりしていたが、この頃からそんな事はしなくなる。

「おはようシグナム」

ほら、こんな風にまるで「普通」に挨拶をするのだ。仕事もする。もうこれがヤバイ。完全にぶっ飛んでる。

一週まわってまともに見えるがまともじゃない。なぜなら

「シグナム二尉！ ハラオウン執務官が！ 執務官がまた虚空の彼氏に向かって話しかけています！」

この様に、その辺の局員が私に報告してくるようになるからだ。

「シグナム二尉！ 執務官の様子が！」

知らん。知らん。知らん。知らん。知らん。Bボタンでも連打しておけ！ 進化キャンセルしろ！

くそっ！ 願う事ならあの5年前の可愛らしいテストロッサのままでいて欲しかった。なぜあの時の私は中学生に上がるときに進化キャンセルをしなかったのだ！

種族値が上がって強くなっても特性が使いにく過ぎる。ケツ○ングもびっくりだ！

なにが種族値670だ！ だれか胃液を持ってこい。それか悩みの種でも良い、いつそ特性を不眠にしてみえ。

「お願いしますシグナム二尉！ あなたしかいないんです！」

現実逃避をしていた私に縋るように局員が土下座をする。

DOGEEZAは万国共通だ。

「くそっ！ わかった、テストロッサはどこだ！」

BBBBBイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
「シグナム二尉！ それ以上はハラオウンイ執務官が死んでしまいます
！」

「私は！ 一向に！ 構わん!!」

進化キャンセルするためにひたすらBボタンを連打する私を局員
が羽交い絞めにし止めようとする。

「ダメですって！」

「私は!! 一向に!!! 構わん!!!!!!」

貴様も彼氏なんてできた事が無いだろうが、小娘えつ！ 幻覚や幻
聴まで聞こえるお前に彼氏云々なんて言われたくないわあああああ
あああああ!!!!!!

「だれかー！ 提督う！ 提督をつ提督を呼んでくれえ!!!」

まだまともな局員の叫び声がむなしく響き渡った。

*

*

十日目

この頃になるとテストタロツサはベッドから起き上がれなくなる。
今までストレスなのかなんなのかしらんが、食事が喉を通つていな
かったらしく、ひどく衰弱している。

今は医務室のベッドで病んでしまった局員と共に精神安定剤と点
滴を投与されながら寝ている。

そんな中、集会が開かれた。大事な、大事な集会だ。

前にクロノが立つ。その姿は随分とやつれているように見える。

そんな私も、他の局員から「ゾンビみたいな顔してますよ」と言われた。ソイツもゾンビみたいな顔をしていた。

「えー、皆知っていると思うが、テスタロッサ・ハラオウン執務官が倒れた」

クロノのその言葉を聞く局員も相当数がゾンビみたいな者ばかりだ。

「しかし、その執務官、ひいては皆の頑張りのおかげで僕達が追っていた犯罪組織のアジトが掴め、なおかつその規模も判明している」

クロノの言葉でその場に居たほぼ全ての局員から感動の声があがる。遂にこの時が来た。

「僕はもう何も言わない。諸君も全てわかっているだろう」

『YES！ YES！ YES！』

その時、艦内の心は一つになっていた。

「さあ、始めよう。一心不乱の大虐殺だ。ここまででこざらせた奴らに絶望を与えよう。害虫のように湧き出て、僕達を苦しめるアイツらを駆除しよう。諸君は何を求める？」

『戦争！ 戦争！ 戦争！』

「いいや違う。これから始まるのは虐殺だ！」

『虐殺！ 虐殺！ 虐殺！』

「そうだ！ 奴らに目に見えてやろう！ イケ！ 正義の使者よ！ その心に秘めた正義を執行しろ！」

提督から発せられた世紀の大号令によって我々は鬼となる。

犯罪者を滅ぼす。ただそれだけの為に動く鬼に。

「な、なんだこいつ等、普通じゃねえ！」

犯罪者の一人が叫ぶが気にしない。私を筆頭に戦えるものは全てが犯罪者を滅ぼすために獅子奮迅の活躍を見せている。

こう言っているが実際は誰ひとり殺していない。非殺傷設定と言うのは素晴らしい機能だ。なにも憚ることなく思いつきり相手を斬れるのだからな。

そうして犯罪者を一人、また一人と追い詰め確実に制圧していると、後方から悲鳴が聞こえた。

『シグナム二尉！ 奴が、奴があ！ もう、無理です！ 我々でh——』

通信をしてきた局員はわけのわからん事をわめくとすぐさま通信がきれる。

その瞬間、後ろから強大なプレッシャーを感じると共に、金色の雷撃が奔り私の目の前の犯罪者を焦がした。

それに驚き後ろを振り向くと——

——目の前に居たのは死神だった。

「ヒドイよ皆。私と彼を引き離そうとするんだもん」

そこに居たのはテストタロツサだと思わしき人型。

その頬はコケ、髪はぼさついております、ツインテールに纏められているとは思えないほど荒れている。しかしその綺麗に輝く金色は褪せず、その様がまるでこの世のものでは無いように見えた。

「あ、ああつ」

私はあまりの恐怖に手が震え、愛機であり魂を込めた愛剣でもあるレヴァンティンを落してしまう。

カラン、とレヴァンティンは音を立て虚しく地面に転がる。

「コイツらが、ワタシと 彼」ヲ ヒキはなシタ 犯罪シヤ デシヨ
?」

金色の死神が放つ、まるで死へと誘うかのような恐ろしい言葉は私の耳に届くが、脳がそれを理解することを拒否し、ただただ『恐ろしい』と言う感情だけを私に伝える。

「あ、ああつ！ ああああああああああああつ!!!」

私はあまりの恐ろしさに頭を抱え縮こまり、そのまま気絶した。

その時の戦闘は、出動した武装局員、犯罪組織の構成員合わせ約100名が戦闘。その内60数名が重傷、30数名が軽傷だったと言
う。

そして戦闘終了時、たった一人を除いたほぼ全員が意識不明の状態
だったと報告されている。

後日確認すると、テストタロツサはその時の事をほとんど覚えておら
ず、報告はクロノがごまかしたらしい。

—— 『私の戦友は壊れて』 しまっていた。